

世界の著名な特許にみる ————— 第8回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

エジソン最晩年序章 その7

最後の研究「霊の存在研究」と「天然ゴムの研究開発事業」

生涯現役のエジソン養生訓〈睡眠と食生活〉



科学&知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

1. はじめに

まず、皆様にお断りしなければならないことがあります。今回、エジソンの最終回とお伝えしておりましたが、これを数回に分けて、執筆することにしました。

まず第一弾として、エジソンの最後の研究である、「霊の存在研究」と「天然ゴムの研究開発事業」、それから生涯現役で健康・長寿を誇った「エジソンの養生訓」について、お送りしたいと思います。

というのも、最終回に向けて、書こうと思っていたことを執筆していくと、裏付けのための調査がどんどん増えて、膨大に時間を要する事、またとても一回で収まる内容にはならなくなった為です。

歴史（HISTORY）は、物語（STORY）だともいえ、物語を追っていくうちに、登場人物が勢いを増し、予想を超えて、人物たちが語り始めていくことがあります。筆者は連

載当初より、「エジソンと日本人」について取り上げたいと思っており、エジソンと関わりのあった日本人を調べていくうちに、我も我も、「エジソンについて語りたい」、と彼らが私に強烈に訴えかけてくるもので、更に、「我々がエジソンにこれだけ敬愛の念を抱くのは、我々も同じく、かような人生を送ってきたからだ」、という各自の自分語りも始まり、それに丹念に耳を傾けていくうちに、それはもう膨大になってきまして、これを次回に回す、という風に考えています。

そのための序章として、エジソン自身も日本人の文化的精神性を受け入れる余地のあった人物であること、更に知の巨人として円熟味を増していく様を今回書きました。

また、エジソンとのお別れは、当時の世界の人々にとって重大なことであって、お別れに向かい、お別れをどうしたかということも、やはり丁寧に書きたいものであること、更に、エジソンの遺した集大成を現在確認し

たり、体感したりできることの情報源も入れたい、そして、という風に、色々と私の方でも想いが募っておりまして、そのために、何回かに分けてお送りしようと思った次第です。

それでは、第一弾、お読みください。

2. エジソン最晩年の探求

霊という電子的存在 あの世界との交信機

エジソンの探求心は、唯物論的な物理現象の探求のみならず、形而上学的な超越的領域についても長年及んでいました。最晩年において、再び死後の世界への解明に取り組んだのも、興味深いことです。

伝統的には、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ（1646年-1716年：ドイツの哲学者・数学者・政治家・外交官・法学博士）がおり、そこから更に発展させた、エマヌエル・スウェデンボルグ（1688年-1772年：スウェーデンの生理学者・科学者・神学者）がいました。そして、エジソンが敬愛の念を抱いていたマイケル・ファラデー（本連載第2回「特許王エジソンその1」を参照）も、こうした思想の流れを汲む、根源的な調和を、物質の理解の中に意識しており、またエジソンが生涯の師と仰いだ、ラルフ・ウォルド・エマソン（1803年-1882年：アメリカの哲学者・作家）もスウェデンボルグの思想に影響を受けたものでした。また、電話と蓄音機発明のライバル、グラハム・ベルも霊的存在を電氣的性質から考える仮説を立ててみたところはエジソンと同じでしたが、ただ両者で決定的に違うのは、エジソンは具体的な実験を開始したところにあります。

エジソンの取り組みは、言ってみれば、肉体を離れたあとの精神（魂）の存在の行き場について、検知する方法を探求するもので、また、輪廻という概念をも自分の中で理解しようとしていました。次回以降、エジソンと日本人について書きますが、日本人の精神性にエジソンが通じ合ったことも、この死の直

前までエジソンが追求していたテーマにもあるでしょう。

エジソンは古今東西の宗教の經典も読破していましたが（超読書家で、数万冊の蔵書）、全てに真実があるというように接しており、偏ることがありませんでした。

目に見えないものを信じないのではなく、何かしらの方法で、測定し、その目に見えないものを捉えることが出来れば、わたしたちは、その目にみえないものの存在、宇宙の存在、ひいては人間の存在の謎を解くことに繋がるでしょう。それだけエジソンというのは、発明王であると同時に、知の巨人の一人に連なるということをお伝えしたいと思い、取り上げました。

3. エジソン最後の研究

(1) 国産天然ゴム開発 植物関連発明

もう一つのエジソンの最後の研究と発明は、これまたなんと、今までとは全く畑が異なる農業・植物学分野で、国産ゴム開発における植物関連発明でした。

本連載の第6回「鉱山開発事業からのセメント事業転向」を調べることになったときも、えっ、と思いましたが、それを一から理解するのは骨が折れるものでしたが、最後は植物を扱う研究に手を出されるとは、と思いました。改めてその幅広さと自由さに驚きと憧れを感じます。

エジソンは様々な植物を採取し、その成分を化学的手法により根気強く分析していきました。

エジソンが子供のころに成りたかったのは“化学者”でした。薬品を買う資金を稼ぐために、車内売り子を始め、より資金と実験時間が融通できると思った電信技術士へ踏み出したことにより、白熱電球の発明で名を残しましたが、元来化学実験を愛してやまなかったエジソンの生来の志向により、エジソンは生涯、化学者であったのです。また化学というのは試験管で出来て、大掛かりな装置や設